

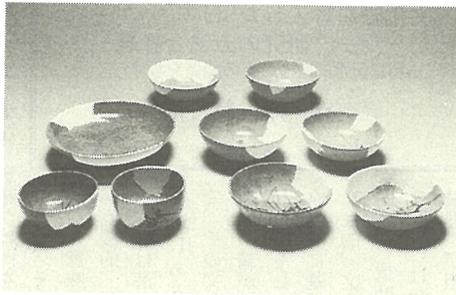
である。私費で軽井沢に創造科学研究所を創設（昭和三五年）夏季休暇中約一月間、後輩の同志社大学工学部学生六名、助言のため教官二名が参加して軽井沢ゼミが行われた。教師と学生が起居を共にして加藤から創造性を養う訓練を受けたのである。筆者も二度参加する光榮に浴したが、老先生の語られる言々句々は今でも不思議と耳に残っている。加藤は「創造は直感より生れ、直感力を養うには心がきれいである必要がある」と説いた。きれいな心とは既成観念に囚われず物事を正視する心であろうと私なりに解している。そして加藤と五郎も「裏の子」であり新島襄の夢を実現した人であると思うのである。

（大学工学部教授）

同志社校地出土の埋蔵文化財（19）

肥前産京焼写し碗・皿

鈴木 重治



新島会館地点 SK124他出土
右下、口径12 cm、器高6 cm

（江戸時代）

京都の伝統工芸の一つに京焼がある。中世六古窯の中に含まれる瀬戸窯の技法を基礎に、桃山時代に出現したとされている。考古学的にみると、京焼の歴史的發展過程を区分して、一期、二期、三期に分け、

楽焼の登場後、伊万里焼の出現期までを一期としている。仁清や乾山の活躍した時期が二期に相当し、色絵や陶器の全盛期である。

磁器の導入以後を三期としているが、これには、中国産の輸入磁器や伊万里焼の染付の影響が大きく左右している。伊万里焼をはじめとする肥前産の陶磁器と、京焼の關係はそれ以前から認められ、出土品によっても検証されている。つまり、出土品から磁器が登場する以前にすでに陶工の間往來があり、技法上の交流や、商品化された製品を通して、互に影響し合っていることがわかる。とりわけ十七世紀後半の江戸時代前期から中期への過渡期の陶磁器が、そのことをよく物語っている。ここに示した新島会館地点の発掘調査の際、廃棄土坑の一つから大量に出土した肥前産の京焼写しの一群など、その好例である。「清水」の銘をもつ山水文の鉄絵の碗、皿は、伊万里市の御経石窯などで、当時の京焼を写して生産されたものである。

すでに、江戸時代からブランド品のコピーが出廻っていたことになる。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）